

メッセージ

高埜利彦教授ご退職に寄せて

高埜さんに贈る

安藤 正人（アーカイブズ学専攻元教員）

昭和28年生まれの北の湖や二代目若乃花を「花のニッパチ組」と言うそうですが、私は日本近世史学界にも「花のヨннаナ組」というのがあると、かねがね思っていました。東の高埜利彦、吉田伸之、西の藤井譲治といった、いずれも1947年生まれの、近世史研究をリードしてきた面々です。4年遅れて生まれた私は、学部生・院生時代、山梨県の『大月市史』編纂事業や「山口ゼミ」（東大史料編纂所山口啓二先生を囲む自主ゼミ）を通じて「花のヨннаナ組」に日本近世史のイロハを教わりました。1977年に国文学研究資料館史料館（通称国立史料館）に就職した私は、次第に文書館運動やアーカイブズ学研究に傾斜していったので、高埜さんにはすっかり見放されたかなと思っていました。しかし、1993年に高埜さんが学習院大学史料館長に就任した頃から、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）などで再び活動を共にするようになりました。これが私の幸運の始まりでした。全史料協での高埜さんの活躍は目覚ましく、とくにアーキビスト養成の問題に関しては、専門職問題特別委員会委員長として大変な働きをされました。それと同時に、自ら学習院大学大学院に専門課程を創設しようと、着々と準備を進めました。1996年の全学向け総合基礎科目「記録保存と現代」の開設を皮切りに、国際シンポジウムの開催、大学院専門授業「史料管理学」の開講、いわゆる「高埜科研」の実施、「日本アーカイブズ学会」の設立など、次々に秘策を練り出し、ついに2008年、日本で初めてのアーカイブズ学専攻大学院を生み出しました。私はこれらほとんどの企てに、高埜さんの補佐役として加わらせていただきました。

高埜さんからアーカイブズ学専攻の具体的な設置構想を聞かされたのは、2004年か2005年、場所は五反田駅前の「グリルエフ」というレストランでした。カウンター席でかなりの長時間、胸をワクワクさせながら高埜さんの構想に耳を傾けた記憶があります。かつてロンドン大学のアーカイブズ学大学院に学び、いつかは日本にもアーカイブズ学の大学院をと夢見ていた私にとって、こんなに嬉しいことはありませんでした。

以来十余年、アーカイブズ学専攻



は順調に育って、そろそろ青年期にさしかかろうというところでしょうか。はからずも、目の病気のせいで私の方が先に学習院大学を退職することになり、高埜さんにはまこと申し訳ないことでしたが、高埜さんは見事に職責を全うされ、しかも人の二倍三倍の仕事を成し遂げて、このたび晴れて定年の日を迎えられました。「高埜さんに贈る」というタイトルを付けながら、いったいどういう言葉を贈ればよいかわかりませんが、心よりのお祝いとともに、まずは、酒がからきしダメな私に長年辛抱強くお付き合いいただいたことに深く感謝したいと思います。そして、しばらく休まれたら、再びそのたぐいまれな構想力と実行力を日本のアーカイブズ界とアーカイブズ学界のために発揮されるよう、心から期待しています。

高埜先生を激励することば

松岡 資明（学習院大学元客員教授）

つい最近まで知らなかったが、室町時代のころは相撲の土俵は四角形だった。「すもう」を「角力」と表記したり「角界」などという言葉が使われたりするのはその名残なのだろう。ところが今も、現役の四角い土俵が岡山県勝央町の植月地区にあるという。室町時代後期に設けられ、500年以上を経た今も奉納試合などに使われる、日本唯一の四角い土俵だそうである。

今も何かと話題の多い相撲には、知られざる歴史がまだまだ埋まっていそうだが、大名屋敷の武士だけが楽しむことのできた相撲が、近世中期の経済発展を背景に庶民の楽しみへと広がっていった様子を読み解いたのが高埜先生である。聴衆が大講堂を埋め尽くした最終講義でも相撲の話が散りばめられていた。

先生のお話の巧みさは言うまでもない。だが、それだけではない。聴衆が思わず耳を傾けてしまうような身近なテーマを歴史研究に組み入れる視野の広さがあるためではないだろうか。その視野の広がり、歴史学とアーカイブズ学を結びつけ、大学院の専攻課程にアーカイブズ学をいち早く取り入れた源泉のように思える。

高埜先生は古希を迎え、大学を去られた。しかし、先生にとっての大学は活躍される場の一つであるにすぎないと思う。アーカイブズはいま、様々な意味で大きな変革期にある。大学という場とは異なる、さらに広い場に立脚され、アーカイブズを社会に浸透させていくことにお力添えいただければ、これに増す喜びはない。

高埜さんに出会って三十数年

入澤 寿美（アーカイブズ学専攻教員）

学習院には教職員野球クラブというのがあり、高埜さんが学習院大学にいらっしやってクラブがあることをお知りになって、入部された時が最初の出会いであったと記憶しています。37年前のことです。皆さんもご存知のように高埜さんは東大の野球部にいらっしやっ

たこともあり、教職員クラブでは守備のかなめであるショートを守っていただきました。私はその当時キャッチャーが主な守備位置で、相手が盗塁してきたときは、私からの悪送球も見事にさばっていただき、ほとんど盗塁は許さなかったと記憶しています。なお、当時のピッチャーの中でピリッとしないのがいたのですが、何とかピッチャーをリードしていたら、ショートから「ナイスリード」



という声をいただき、うれしく思った記憶があります。当時大学グラウンドで早朝野球（朝6時開始）や荒川の河原で豊島区のリーグ戦などかなりの試合数をご一緒に戦いました。

高埜さんがクラブをおやめになってからは、校内でお会いした時に挨拶をする程度でしたが、2007年アーカイブズ専攻を立ち上げるので兼務してほしいということで、2008年の専攻発足以来お話をする機会がしばしばありました。その中でも、歴史というのがこれほど面白いものかと教えてくださったのが高埜さんでした。たとえば「あねっちゃん」へ行く道すがら、この道は江戸時代からあったものだとか、忘年会だったと記憶していますが、ドジョウ屋へ行った帰りに大川にかかっている橋の話等をなさっていただきました。

とりとめのない話になりましたが、最後に高埜さんの退職時に部屋を整理されていた時に見つけられたのだろうと思われる、野球クラブ時代の年間記録（私の記録と高埜さんの記録も入っていた）を私に下さったのですが、さすが、アーカイブズを先導なさっている方は違うなと思った次第です。

今後ともよろしく願いいたします。

高埜利彦先生のご退職に寄せて

下重 直樹（アーカイブズ学専攻教員）

高埜利彦先生の学習院大学での最後の一年間、まことに僭越ながら「同僚」の一人としてご一緒させていただき、大変光栄でありました。教育者としてあるいは学問をする人間として、どのようにあるべきか、前職の国立公文書館や内閣府で身に染みた「役人気質」が抜けず、大学人としての自分の新たな姿を描き切れなかった私にとって、わずかな間でもその聲咳に接し得たことは、何よりもの大きな救いとなりました。

アーカイブズ学専攻の諸会議では、創設から10年が経過したとはいえ、時には前例もなく、まだ新しい学問領域にありがちな未熟さもあって、確信をもって直ちに結論を見出すことが難しいような場面に直面することが数多くありました。

そのような折、新米教員で右も左も弁じ得ない私などは、ただただ俯くばかりでしたが、

一同が逡巡していると、高埜先生は30有数年のご経験のなかから私たちが自ら答えを探し出せるようなヒントを、時事に対する鋭い観察やユーモアも交えながら、そっと教えてくださったように記憶しております。

着任して二年目、ようやく「方向」くらいは分かるようになり、気が塞げば「目白の森」を徘徊するような余裕も出てまいりました。高埜先生は、このキャンパス内の豊かな緑—樹木が放つ生命力と木漏れ日の優しい温もり—を大いに愛しておられたように思います。その風景は、往時と比べて幾分か変わってしまった所が多いとのお話をうかがったことがあります。30歳台半ばで学習院大学に着任された高埜先生も、きっと長い教員生活のなかで、このように悩み、迷われたことがあったのではないかと想いにふけながら、ふと立ち止まっては、苔むしながらも聳立する大樹を仰ぐことがあるのです。

窓外に見える木々の葉も色づく秋を迎え、高埜先生が学習院大学をご退職されてから、次の一年が過ぎ去ろうとしております。安藤正人先生、高埜先生、そして今年度末には入澤寿美先生と、アーカイブズ学専攻の「創業」を成し遂げられた先生方が相次いでご退職されるなか、記録の管理やアーカイブズに対する社会的関心や要請の高まりにより、アーカイブズ学専攻の姿も大きく変容を迫られつつあります。

私に残された定年までの30数年間という長い時間のなかで、高埜先生たちが築かれた「記録を守り、記憶を伝える」ための学びの場を、今後新たに迎えていくはずであろう仲間たちとともに、より豊かなものとしていきたいと念じております。

高埜先生のご退職に寄せて

武内 房司（アーカイブズ学専攻教員）

1990年代、初めてベトナムを訪れた時のことである。留学している日本の大学院生がハノイのレストランを案内してくれることになった。会うなり、ご専門は国際政治ですか、それとも人類学ですか、と尋ねられた。なぜそういう質問がでるのかと尋ねたところ、気に入ってもらえるレストランが専門によってかなり違ってくるのだそうだ。往々にして国際政治系はちゃんとしたいわゆるレストランを、人類学系の研究者はストリートの庶民派食堂を好むとのこと。連れて行ってもらったのは“平民食堂（クム・ビンザン）”と呼ばれる庶民の集う食堂であった。ハレの日に食べるようなメニューばかりのレストランと違って、価格・味を含めて庶民の厳しい要求水準を満たした家庭味あふれる“平民食堂”の料理は確かにハノイの文化伝統を感じさせるに十分であった。

2010年12月、ベトナム国家文書・アーカイブズ局の招きで、アーカイブズ学専攻の安藤正人先生・高埜利彦先生、それに国文学研究資料館の加藤聖文先生とともに、またハノイを訪れる機会があった。同局のヴァー・ティ・ミン・フオン局長、ベトナム国家大学人文社会科学大学アーカイブズ・文書管理学部主任のヴァー・ティ・フン教授以下、暖かく迎えてくださり、大変実りの多い旅となった。その折、初めてハノイを訪れたときのことを思い出し、先生方を革命博物館脇の“ビアホイ”と呼ばれる大衆ビア・ホールにご案内したこ

とがある。ベトナムの庶民が多数集うこの“ビア・ホイ”に足を踏み入れたとたん、高埜先生は、またたく間にその場の雰囲気にとけこまれた。ああ、高埜先生はくだんの院生の基準で言えば人類学派なのだなと改めて気づかされた。その後も、アーカイブズ学専攻の研修旅行で韓国、台湾、ベトナムにご一緒させていただいたが、先生の現地の庶民を含めアジアに対し等身大かつ愛情を込めて接する姿を目にすることができた。



レストランの話に戻れば、しかし、ベトナムにおいては、今や日本でも目にするようなチェーン店がはばをきかしばじめ、ハノイの“平民食堂”も“ビア・ホイ”もどんどん消滅し、風前の灯である。グローバル化の名のもとに伝統文化は危機的状況にあるともいえる。そうしたときに、現状を相対化し未来への展望を思索するうえで大きな役割を果たすのが、高埜先生や安藤先生が普及に尽力されたアーカイブズの思想なのであろう。高埜先生にはアーカイブズの可能性について、今後も引き続き私たちを啓発していただければと思うしだいである。

高埜利彦先生を送る

千葉 功（アーカイブズ学専攻教員）

高埜利彦先生と入れ替わりでアーカイブズ学専攻の一員となりましたので、高埜先生の思い出は史学科時代が中心となります。

私が高埜先生に初めて御目にかかったのは、先生は御覚えではいらっしやらないと思いますが、先生が1991年、東京大学文学部国史学科に非常勤講師としていらしたときでした。先生の授業を聞いた後、先生の最初の著書にあたります白い装丁の本を一生懸命に読んでレポートを書いた思い出があります。一学生には難しい内容でしたが、研究の最前線とは何かということを感じた気がします。

それから月日が流れて、井上勲先生に声をかけていただきまして、2005年から学習院大学文学部史学科の専門科目を非常勤で担当することになりました。非常勤講師にとって4月の講師歓迎会は楽しみです。おいしい中華料理を御馳走になれるからです。ある年の講師歓迎会は横浜の中華街で開催されたのですが、御多分にもれず、あつかましくもお酒をだいぶ飲みました。そうしたら、帰りの電車で高埜先生の隣に座ったのですが、先生からは「君はよくお酒を飲むねえ」と言われ、御褒めいただいたのか、それとも呆れられたのか、判断に迷ったこともありました。

さらに月日が流れて、2011年からは学習院大学文学部史学科の一員に加えていただきましたので、それからは日常的に先生と接することになります。私の専攻する日本近代史は先生の専攻される日本近世史と隣接していますので、互いに卒論・修論・博論を読みあうなど、そのつながりはより強かったと思います。先生からは、それこそ職場での過ごし方や卒論への取り組み方から、お酒の飲み方まで色々と教わりましたので、それこそ一言では語りつくせません。

ただし、その中でも特に強く印象に残っている教えだけを申しますと、それは史学科では常に全員野球で学生にあたるべきだということ、畳の上の水練ではいけないということです。前者に関しては、外部の委員や野球部の部長などで寸暇もないながら、学生をよく把握されていらっしゃるのが印象的でした。また、後者に関しては、机上の空論に惑わされず、現実に向き合えということかと私は理解しております。今までアーカイブズ学の重要性は承知しながら、怠惰なため勉強から逃げまわってきた私が、先生の後任としてアーカイブズ学専攻との兼担となりましたのも、四の五の言っている暇があったら飛び込んで実地に勉強しろという教えなのではないかという気がするのです。

高埜利彦先生への手紙

保坂 裕興（アーカイブズ学専攻教員）

長いあいだアーカイブズ学の研究者・リーダーとして、またアーカイブズ学専攻を創設した専攻教授として、私ども後進を励まし育ててくださり、この世界を成長させてくださったことについて、心よりお礼を申し上げます。また私自身、1981年に史学科に入学して以来、歴史学の師として、また人生の師として、陰日向なくご指導をいただきましたことについてもお礼を申し上げなければなりません。ありがとうございました。

さて記憶の中にあり、それを語り出して、お礼を述べたいことは山ほどあるが、最も頭の中に焼き付いているのは、専攻が開設となった2008年度のはじめ、高埜先生、安藤先生と私の3人で竹橋の国立公文書館を訪問し、現場での実習（機関実習）をお願いした時のことである。この実習を義務づけていた授業科目としての「アーカイブズ実習」は、前期課程入学者8名を擁して動き始めていたが、その時点で実習実施の目処は立っていなかったのである。

当時の手帳によれば、それは5月のある日、地下鉄の改札口で先生方と待ち合わせ、午前10時30分より菊池光興館長（のち学習院大学客員教授）と館長室で面会に臨んだ。高埜先生が口火を切り、専攻開設のあいさつを述べるとともに、実習の必要性を説明され、続いて私から、事前に用意していった「『アーカイブズ実習』実施要領（案）」にもとづいて具体案を説明し、協力をお願いした。安藤先生（専攻主任）は、世界各地のアーカイブズ機関で様々な形で実習のようなことが行われ、アーキビストが養成されていることについて述べられた。これに対する菊池館長の返答は、私にとってはあっけにとられるほど意外なものであった。「当然のことですよ。」とおっしゃったのである。公文書等管理の関係者

が長年待ち望んでいた大学院教育課程ができたのだから、実習や教育・研修で相互に協力していくのは当然のことである。さらにこれを機会に、「横の連携」を充実させていきたいとの趣旨であった。

面会の終了間際、理事として同席した高山正也先生（のち国立公文書館長、またのち学習院大学客員教授）が、理事室で実務の話をしましようとお声かけくださった。高埜先生た



ちが帰り支度をしているほんのわずかな間だったと思うが、理事室に入ったところ、呼びだされた同館次長・総務課長に「学習院大学から実習生を受け入れることになったので、万事よろしく頼みます！」と業務上の指示を出してくださった。行政における組織力とはこのようなものであるのかと驚くとともに、もしかすると予め用意していただいていたのではないかと感じて敬服の念を抱いたことを覚えている。そしてこれを機に、並行して実習のお願いをしていた首都圏のアーカイブズ機関との間で急速に話が進み、その夏、8名すべての実習が実現したばかりか、以後10年の間、実習生を送り出す夏を越えてきた。

それにしても、この〈大ばくち〉が成功したのはなぜだったろうか、などと考える。教育を博打に喩えるのは不束にちがいないが、先生ならば許してくれるだろう。2004年に日本アーカイブズ学会を創設した際、高埜先生が国立公文書館を訪れ、菊池館長に直談判した末、互いに打ち解け合い、信頼関係を築いたという有名な話を私たちは知っている。信頼を築くということは大切である。たしかにそれが土台となった。しかしそれだけでもない。面会に臨むにあたっては、先の「要領（案）」を用意し、事前の打ち合わせでは3人のおよその役割と順番を決めていた。本番では、挨拶、説明、お願いを、熱意を込めて行い、先方の返答、説明、応対に耳を澄まし目を凝らして、その全てを吸収しようとした。準備、チームワーク、熱情、敬意、学習があったからではないか。当日の帰り道、竹橋駅に向かう桜並木の歩道で、高埜先生も安藤先生も微笑んでいた。私に言わせれば、高埜先生が水戸の黄門様であり、とりあえず安藤先生は格さん、私が助さんになったような心持ちであった。何か大きな事件を解決したような、またこれからも、どんなことにでも挑戦できそうな気がしたことを思い出す。

ほんの一例ながら、このような鮮烈ではらはら、ドキドキするような出来事を経験させていただき、また時にそれらを思い出しながら、今日まで勤めてきた。このようにして仕事をやり遂げていく楽しみを教えてくださいましたことに、あらためて心から感謝を申し上げ、摺筆させていただきます。

近世史とアーカイブズと。高埜先生が示されたこと。

森本 祥子（2009-2011年度 助教）

高埜先生に初めてお会いしたのは、学部学生のときだった。お茶大史学科に非常勤でいらしゃったときの授業を履修したのだが、たしか最初の講義で先生は、黒板に時間軸の横線を書かれ、いかに江戸時代の最初と最後で朝暮の力関係が逆転したかを話された。それまで、なんとなく200年超にわたって変化せず停滞していたようなイメージだった江戸時代が、実は「動いている」ということに驚いたことを、30年経った今もよく覚えている。

が、まさか、自分が史学科を離れてアーカイブズの世界に飛び込んでからもお世話になり続けるとは、思いもよらなかった。キャパシティの小さな私は、歴史学とアーカイブズ学を切り離すことでしか頭の整理ができなかったが、高埜先生はそのどちらもリードなさっている。あまりに大きな存在だ。

先生は、歴史研究者はアーキビストたれ、という主張をなさり、それは当時アーカイブズの現場に身を置く人からいくらか反発を受けた。アーカイブズを歴史研究から自立させることにもがいていた当時（そしてその立場は私も強く持っていたのだが）、歴史研究者中心のもの見方でアーカイブズ学を単なる技術論と捉えられていると解され、反発を受けたのだった。だが、先生がいかにアーカイブズを理解なさり、アーキビストの専門職化に誰よりも尽力されてきたかということ、今や知らない人はいないだろう。アーカイブズをご存じだからこそのご発言だったこと、今は疑う人はいまい。

高埜先生の講義に目から鱗を落としたにも関わらず、やはり私は江戸時代を学ばなかったのだが、修論で明治初期の外務官僚・外交官の履歴を整理したとき、幕府外国方の役人たちがそのまま明治政府の外務官僚となって外交事務の継続性を支えていたことを知り、高埜先生に教わった江戸時代のダイナミズムを思い出した。日本は250年の間に西洋近代に伍しうる国家運営の力を独自につけていたのだ。私は日本の文書主義・アーカイブズは決して世界に遅れてなどいないと思っているが、その確信の根っこには、江戸時代の重要性を教えていただいた高埜先生あのときの講義がある。

結局、何をやっても高埜先生の大きな手のひらのうえで遊ばされているだけで、きっと先生は「まだまだ視野が狭いなあ」と苦笑されていることと思う。大きな視点でものを見るときはどうか、これからも教えていただきたいと思う。



高埜先生との接点

湯上 良（アーカイブズ学専攻助教）

高埜先生にはマレガ・プロジェクトに関わる委員を務めていただいていたことから、お名前を以前から伺っておりました。しかし、初めてお目にかかれたのは、2017年秋に行われた助教公募の面接の折でした。公募に参加させていただくにあたり、アーカイブズ学専攻や、史学科のホームページを拝見いたしました。「相撲部屋」という表現、そして野球に興じるお写真がとても印象に残っております。同じスポーツマンとしての共感はもちろんのこと、「人を育てる」、「継承する」ということに並ならぬご意志をもっておられることが感じられました。

面接会場の扉を開けると、銀幕のスターや舞台役者かのような鋭い眼光と迫力に圧倒される想いでした。その際、「ローマ大学のフェレッティ先生を知っているか」とのご質問をいただきました。後からプロジェクトに関係しているローマ大学の教員に尋ねたところ、その方のお師匠さまに当たる先生とのことでした。

手元に、高埜先生もご担当された2002年の「記録保存と現代」の試験問題のコピーがあります。「あなたは、これまでの大学での授業の際に配布されるレジュメや資料などのプリント類を、どのように使い、その後どのように保管しているのか（ファイルに綴じこんだ、ホチキスで綴じて机の引き出しにしまった、試験を受けて単位が取れたあと捨てた、友達にあげたなどなど）を記してください [後略]」と問2にあります。授業の資料に至るまで、保存・活用につき、お考えを巡らせておられたことを、専攻に残された数々の授業資料ファイルからも日々感じております。

マレガ・プロジェクトのリーダーである大友先生も、専攻主任の保坂先生も、高埜先生より薫陶を受けた方々です。そうした先生方の元でお手伝いをさせていただき、いわば、「孫」のような存在ではありますが、「アーカイブズ」をわが国に根付かせるべく奮闘しておられる先生のお背中を仰ぎ見つつ、これから少しでも貢献できる事柄を模索しながら、活動を続けてまいりたく存じます。これまで大変お疲れさまでございました。そして、今後ともよろしく願いいたします。



高埜先生のご退職に寄せて

浅井 千香子 (2008-2010年度 副手)

高埜先生は私が史学科一年生のときの基礎演習3組の担任にはじまり、日本近世史ゼミで卒業までお世話になり、その後も史学科(うち2年は先生が主任でした)、人文科学研究所(当時、先生が代表のプロジェクトがありました)、そしてアーカイブズ学専攻と、学習院での私の歩みの中には常に高埜先生の存在がありました。そして、それは学習院におけるアーカイブズ学専攻設置に向けての歩みとも重なっていたようにも思います。

学生時代、先生は文学部長としてお忙しくされていましたが、史料調査やゼミの飲み会などは活発で、そうした席でも折にふれ、アーカイブズ制度の必要性やその樹立に向けての闘志あふれる思いを語っていらしたのを記憶しております。

史学科の副手として勤務をはじめたころ、ちょうど「史料管理学」専門科目や大型の科研費プロジェクトがスタートし、めまぐるしく状況が変化していく様子を傍らから拝見しておりました。大学内で新しいことを進めるにはいろいろと問題も多く、先生の闘いぶりから、多くのことを勉強させていただきました。

専攻開設時、先生は2回目の文学部長をお務めで、その立場もあってか、専攻のことにあまり表だって関わることは控えていらしたご様子でもあり、研究室の準備等は基本的には私にお任せいただきました。大変ではありましたが、とてもやりがいのある得難い経験をさせていただいたと思っております。学生時代から十年あまり、先生にはさまざまな学びや経験の機会をいただき、心より感謝しております。

ご退職後も、先生のことですから、変わらずお忙しくされていることと存じます。お酒はほどほどに、ますますのご活躍をお祈りしております。

高埜先生のご退職に寄せて

後藤 佐恵子 (2011-2013年度 副手)

高埜先生には、史学科の副手時代から6年間(学生時代を含めれば10年間)もお世話になりました。先生はいつも悠然と構えていらして、私が研修旅行などで慌てふためいているときもその都度お声をかけてくださり、その笑顔とお言葉に何度救われたかわかりません。何かに行き詰まっている時もまさに鶴の一声で、その先を切り拓いてくださることが多々ありました。

先生との思い出はたくさんありますが、中でも印象に残っているのは、カナダのブリティッシュコロンビア大学から招聘研究者としてお見えになっていたルチアナ・デュランチ先生の送別会での出来事です。その日は偶然にも高埜先生のお誕生日で、そのことを知ったお店の方が急遽大きなカサブランカの花束とケーキを用意してくださり、皆でベースデーソングを歌い、その場が大いに盛り上がったことを覚えています。

また、院生がアーキビストとして就職を決めた時には、そのことを心より喜んでいらし

たお姿が印象的です。院生の将来を案じ、自分のことのように考えてくださっているのだと、心に残っております。

ある時の海外研修旅行では、出発前に成田空港の荷物検査で、先生が規程の容量を超えた容器に入った整髪料を持ち込んでしまい、その場で没収されてしまったことがありました。先生は笑顔で「僕は台湾でどうやって髪をセットしたらいいんだろうねえ…。」とおっしゃり、当時は「どうしよう…!!」と焦りましたが、今となっては笑い話となった良い思い出です（その後、現地で整髪料は無事に調達されました）。

そして、私がアーカイブズ学専攻を退任する際に高埜先生からいただいたメッセージは、一行に込められたお気持ちがとても嬉しく、今でも何かある度に読み返しては、前に進む力をいただいております。

高埜先生、これまで大変お世話になり、ありがとうございます。これからも健康にご留意され、さらなるご活躍をお祈り申し上げます。



高埜先生のご退職によせて

高橋 奈月（2014-2016年度 副手）

高埜先生、ご退職おめでとうございます。

他学科出身の私は、高埜先生にお目にかかったのはアーカイブズ学専攻でのお仕事が初めてでした。

お仕事を通して感じたのは、先生のゆったりとした存在感でした。先生のゆったりは、達人のゆったりで、細々としたことに動じず、おもむろに大事なことをピタリと言い当てられるのです。

体調不良で仕事を早退した日、文学部棟を出ると遠く百周年記念会館のほうに先生の後ろ姿が見えました。身繕いもままならず、誰にも会わずに帰ろうと思っていたところ、一歩踏み出すと、先生が影でも踏まれたかのようにふわっと振り向かれたのです。その時確かに、私も先生の影に入ったような感じがし、不思議に思いながら目白駅までご一緒させ

ていただいたのを覚えています。その一件から、先生の「間合い」はとても広いので、悟られずに背後にまわるなんて到底無理なのだ…！と私はすっかり観念しました。

アーカイブズ学専攻で勤務する中で、私も視界の外の人に不意に気づいたことがありました。それは、仕事が楽しくわくわくしている時のことで、意識のアンテナが網のように広がって、いつもより周りがよく見えるような感覚でした。

改めてそのことに思いを巡らすと、高埜先生の不思議がひとつ解けるような気がします。先生がゆったりとして、それでいて遠くまで見えていらっしゃるように思えるのは、大樹のように広々と根を張っていらっしゃるからだと思いました。その根はたぶん、遙か見渡せるくらい遠くまで時間をかけて伸びてきた、明るく力強い網目なのです。そして、副手としてお世話になった私の中にも、そのスピリットの片鱗、つまり大学を楽しんでいるときめきがぐんぐん育っていったのです。

高埜先生は、笑顔がすてきな先生でもあります。これからも、周りを広く照らしてくださる先生の笑顔にお目にかかれますのを楽しみにしております。

高埜先生のご退職に寄せて

西山 聖奈 (2017年度 副手)

私が高埜先生のお名前を初めて知ったのは高校1年生のとき、配られたばかりの日本史の教科書を手にしたときでした。「なんて読むのだろう？」——そう疑問に思い先生のお名前の読み方を調べてから3年後、私は学習院大学へ進学し、卒業後は副手として働き、そこで高埜先生と出会うことになります。高埜先生のお名前がふと目にとまったあの日から約10年後のことです。ホンモノの高埜先生にお目にかかり一緒に働くことになるとは、日本史を必死に勉強していたあの頃の私は夢にも思っていませんでした。

背広をビシッと着こなした教壇に立たれる高埜先生、微に入り細に穿った説明でいつも専攻会議を救ってくださる高埜先生は、私が高校生の頃お名前から勝手にイメージしていた通りの凛々しいお姿でした。一方、酒席での高埜先生は赤いお顔にはにかんだ笑顔がトレードマークのほっこりとしたお姿で、そういった意外な（しかしながらアーカイブズ学専攻関係者にとっては馴染みの）一面を知ることができたのは副手の特権であったと思います。

また、高埜先生にとって学習院大学最後という大きな年に、副手としてアーカイブズ学専攻と一緒に働かせていただけたことはとても光栄で、私にとってかけがえのない思い出です。高埜先生がいかにか偉大な研究者であったか、いかに多くの人々に慕われている先生であったかを肌で感じることでできた、そんな時間でした。

1年間という短い期間ではありましたが、在職中は大変お世話になりました。私にとって高埜先生は行く手を明るく照らし、温かく見守ってくださる灯台のような存在でした。そしてアーカイブズ学専攻にとってもまた、高埜先生は専攻の未来を照らし導いてくださる存在であったと思います。今まで本当にありがとうございました。そしてお疲れさまで

した。

末筆ではございますが、高埜先生の今後益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

水曜日の高埜先生

本岡 彩（アーカイブズ学専攻副手）

高埜先生には史学科の学生として、そして史学科の副手としてお世話になりました。この度、先生のご退職にあたり、先生との思い出を振り返ってみると、まず卒業論文の口述試験のことを思い出しました。私は先生のゼミ生ではなかったため、講評をいただくことはありませんでしたが、何か考えているようなご様子で腕を組み、目をつぶられていた先生の姿にとっても緊張したことは今でも忘れられません。

口述試験では張りつめた緊張感の中、ただただ時間が過ぎるのを耐えるのみでしたが、桜満開の4月から副手としてお側にお仕えした3年間は、明るく楽しい日常でした。お酒を嗜んだ次の日は決まって大村庵のカレーうどんを召し上がるのが史学科の先生方ですが、高埜先生もカレーうどんで命をつないでいらっしゃいました。私も先生の真似をして、カレーうどんをよく食べていましたが、前日のお酒をなかったかのように振る舞う先生の境地に至るにはまだまだ修行が必要です。

実は、先生にずっと言えなかったことがあります。たしか、2015年の春のことだったかと思います。目白の桜が満開になる頃、先生は桜の花を少しだけ摘んできては、これで桜の塩漬けを作るとおっしゃっていました。先生は覚えていらっしゃるでしょうか。小さなビンに、桜の花と松本楼で分けてもらった塩をいれて……共同研究室の机上で、数日間は存在感のあったそのビンは、いつの間にか書類の山に埋もれていました。数ヶ月後、その山から桜の塩漬けのようなものを発掘した私は、先生の目を盗んでこっそり捨ててしまいました。ごめんなさい。桜を見るたびにこのことを思い出しては心を痛めておりました。

そして、目白の桜が満開に咲いた2018年4月、アーカイブズ学専攻の副手として文学部棟に戻ってまいりました。次年度以降、私が目白の桜で塩漬けを作ればと思っております。出来上がった際には、桜酒で乾杯するのはいかがでしょうか。

